

「光陰矢のごとし…」

いつの時代も同じでしょうが、後から振り返ってみると月日の経つのは本当に早いもの。「光（日）陰（月）矢のごとし」とはよく言ったものです。

この5月で私が高松市長に就任してはや2年となり、任期の折り返し点を迎えました。また、今年の誕生日で私は50歳。百歳のちょうど半分です。そこまで生きられる自信はありませんが、人生の折り返し点と言えなくもありません。

50歳といえば、織田信長が好んだという幸若舞こうわかまいの「敦盛あつもり」に、「人間50年、下天げてんの内をくらぶれば、夢幻ゆめまぼろしのごとくなり（人間界の50年は、天空界では夢幻（一昼夜程度）に過ぎない）」と続く有名な一節があります。信長自身はこれを積極的にとらえ、死を恐れずに思う存分生きようと、自らを鼓舞していたとのことですが、くしくも彼が本能寺の変（1582年）で自害したのは49歳の時でした。

「旅に病んで夢は枯野をかけ廻るめぐ」の句を最後に、1694年、50歳で亡くなったのは、松尾芭蕉です。代表作「奥の細道」は、「月日は百代の過客はくたい かかくにして、行かふ年も又旅人也ゆき」で始まり、自らと永遠の旅人である「時」を同化させています。そして、九州への旅の途中で倒れるまで、まさに、時間と自然と一体となって旅に生きた、見事な人生でした。

信長や芭蕉らの約50年の人生模様を見せつけられると、時間の長さは同じでも、これほどまでに密度の濃い充実した人生の足跡を残せるものかと、驚嘆せざるを得ません。とてもまねはできないとしても、私自身、論語にいう「知命」の歳を迎えるにあたり、これまで以上に使命感を持って、できるだけ「良く生きる」ことは心掛けていきたいと思っています。

約2000年前の紀元前後に生きた帝政ローマの政治家セネカは「時間の主人」となれない「多忙な人にかぎって…良く生きることが最も稀まれである」とし、「人生は使い方を知れば長い」と説いています。「時」を大切に、常に良く生きることを学ぶべきということでしょうか。「一寸の光陰軽んずべからず（わずかの時間でもおろそかにしてはならない）」（朱熹しゅき）と、肝に銘じておきたいと思います。

【参考】「人生の短さについて 他二篇」

セネカ著（岩波文庫）